

# 美術制作の学習と指導をつなぐ哲学理論の構想

文学研究科哲学専攻博士前期課程1年

赤間 裕太

## 1. 美術制作に関わる学習者と指導者の問題

美術制作を学ぶものにとって、しばしば問題となることは、「いかにして制作を進めていくのか」という実践的行為に関わる問題である。こういった問題は、各自が自分で考えることを通して解決していくのが通例である。

一方、美術制作の指導をするものにとって問題となることは、「いかにして制作を進めていくのか」という学習者の問題をいかにして解決していくのかという問題なのであり、これには自らが制作を進めていくこととは違った能力が必要とされる。

このように美術制作の学習と指導の場においては、学習者自身の問題と、指導者自身の問題が存在しているのである。そしてこの両者の問題は、互いに干渉し合わない、並列的な問題なのではなく、両者が関係し合いつつ立ち現れる問題であると言える。

このような学習者と指導者のあいだに立ち現れる問題は、一方の努力のみで解決することは困難であり、両者の両者自身による問題の自覚と、その問題を解決することへの絶えざる努力が求められる。

とは言え、問題の直中にある学習者と指導者にとっては何が問題なのかを自覚すること自体が難しく、また、言うまでも無いことではあるが、その問題を解決していこうとすることもまた困難なのである。

そこで私が本稿において提示したいことは、この学習者と指導者のあいだにある問題とは一体どのようなもので、その問題をどのように解決して行けば良いのかということ、つまり、問題解決の方法論である。

## 2. 問題解決の方法論について

学習者と指導者の関係の中で立ち現れてくる、美術制作に関わる問題は、本来であれば、

学習者自身、あるいは、指導者自身が自らの指導者との関わり、あるいは学習者との関わりの中で自ら自覚していくことが望ましい。しかし、問題が問題であるのは、その問題を自ら自覚することが困難であるためであり、そのような困難な問題を自覚に導こうとする哲学を提示することが私の試みるところなのである。

さて、そのような問題自体を自覚することが困難な問題に対し、一体いかにして関わっていけば良いのだろうか。問題が問題として各自にとって明らかとならない限り、この問題を解決すべきものとして主張することはできない。

そこでまずはこの学習者と指導者との関係の中で立ち現れる問題それ自体が一体どのようなものなのかを明らかにしようと思う。

美術制作の学習と指導に関して一体何が問題なのかというと、それは端的に言えば、一つは指導者の指導が学習者に伝わりづらいということ。それからもう一つは学習者が学習者自身の問題を問題として明確化することが困難であるということである。

この問題の明確化の困難さに美術制作の難しさの原因がある。この美術制作の問題は、学習者にとってそれとして明確化が困難なのではあるが、潜在的には本人にとって意識されている。この潜在的に意識されている問題は、それとして意識されたりされなかったりしながら、制作者は自身の制作を進め、その中で本人にとっても気付かれぬままに解決されてしまっている場合が多い。そのため、美術制作について自らが獲得した実践知、あるいは行為知を他者に伝えようとしたとき、獲得されてしまった知をそれ自体明示的に存在するものとして扱い、それを語りさえすれば、相手に伝わるものとして取り扱わざるを得ないのである。

しかし、美術制作のような実践的行為に関わる様々な知は、それ自体として存在しているものとしていわゆる言語的な知識のように学ぶことを通して獲得されるものではなく、数々の実践の中でそれ自体から自然発生的に、制作者に生じた経験であり、可能性として存在する制作に関する潜在的な選択支なのである。

こういった知は本来であれば、制作者自らの経験を通してのみ獲得され得るのみであり、そのように獲得される知は、もはや他人に伝えることが不可能であるとさえ思われているような特異性を持っているのであり、指導者にとって問題なのは、このような伝達不可能であるような実践知を学習者にいかに伝えていくのかという問題なのである。

こういった指導者の問題については、すでに多くの指導者の頭を悩ませているものではあるが、そのように悩むことが直接問題の解決に繋がっているわけではないという面があることは否定できない。

そのように、学習者に伝えることが難しく、学習者自身でも自覚が困難な問題は、指導者にとっても、学習者にとっても問題なのであり、だからこそ、学習者と指導者がその問題を共に明らかにし、解決して行くことができればもっとも理想的なのである。

しかし、問題そのものがあまりに不明瞭であり、もはや学習者も指導者もそれとして明確

化できず、明確化されない問題をお互いのあいだに潜在的に意識しつつも、それをお互いのあいだの問題であると特定せずに、学習者は指導者の指導方法の問題と捉え、指導者は学習者の才能や努力の無さとして確定してしまうのである。

そのように学習者と指導者がお互いに潜在的な問題の存在を乗り越してお互いが相手を問題化し、そのようにお互いに責任転嫁し合う状況が現実には起こっているのである。そのような状況においては、本来考えるべきことは、まさにあいだに存在する問題を明確化することなのであり、問題を明確化することを通して、お互いが歩み合うことなのであり、それを通して学習者と指導者は本当の学習者と指導者になることができるのである。

これはいわば、学習者と指導者とのあいだに潜在的に横たわる問題が、潜在性の内にとどまる限り、学習者は指導者を持たない孤独な学習者であり、指導者は自分が指導者だと思っているだけで、学習者にとっての指導者となっていない、見せかけの指導者であり続けるということなのである。

そこで私が提示しようとするものは、この学習者と指導者とのあいだの問題をお互いが自覚できるようになるような、お互いにとって気づきとなるような理論なのである。この理論が公に提示されれば、学習者と指導者のあいだの問題は、潜在性の枠内を越えて、お互いが共に解決していくべき問題となるのである。

では次にその理論の内実について述べていこうと思う。

### 3. 問題解決の方法論の内実

美術制作の指導における学習者と指導者のあいだの問題を学習者と指導者の関係の中で解決して行くことは非常に困難である。それはなぜかという、問題そのものは、学習者にとっては指導者との関係の中に、指導者にとっては学習者との関係の中にあることは分かっているのではあるが、その問題の発生を学習者は指導者の指導方法や態度に、指導者は学習者の能力や経験に、その原因を求めてしまうため、お互いが問題の解決を相手にゆだねてしまい、自分が問題解決に関わろうとすることがなくなってしまうからである。

もっともこのように相手に問題解決をゆだねるといのは、自分の問題の解決を図ることを怠って、相手に問題の解決をゆだねるという意味ではなく、自分の問題は自分で解決せざるを得ないと思うことの中で相手の存在を軽んじるというようなあり方であいだの問題の解決を相手にゆだね合っているのである。なぜ相手を軽んじることが相手に問題の解決をゆだねることになるのかというと、あいだで生じる問題をあいだで生じているものであると捉えずに、自分に生じている問題であると捉え、そのように問題を自分だけの問題としてしまうために、お互いが相手の存在を忘却するのである。そのような忘却の中では、相手というのは、すでに自分に存在している問題を顕在化させるだけのやっかいな存在なのであり、やっ

かいな存在であるが故に、あいだの問題をあいだの問題として、共に解決していくべき問題として捉えずに、相手との関係の中で生じる問題は、関係の中で顕在化されるだけであって、その解決に相手は一切役に立たないものとして相手を度外視するのである。

そのように相手の存在を度外視するということが、問題の発生を考えようとしないうこと、問題の発生に関わる相手との関係について考えないことへと繋がっていき、そのように相手との関係の問題について主題的に取り組んで行かないということに、あいだの問題の解決を相手にゆだねてしまっていることが含まれているのである。

これは言い換えれば、あいだの問題を解決することから逃れ、あいだの問題の存在を相手の存在を度外視することを通して抑圧し、自らが問題だと思っている自己自身の問題のみに関心を集中させ、それによって、解決すべきは自分の問題だけであって、相手との問題はもはや解決することができないもの、解決しようと思わなくて良いものとして問題解決を図ることをやめてしまうのである。

それによって、あいだの問題は抑圧されつつ存在し、解決が図られぬままに存続することになり、その一方で自分だけが問題だと思っている問題の解決を図るのみになるのである。そうすることによって、学習者は自分が問題だと思っているもののみに関心を向け、指導者は、学習者に対しては、指導者自身が学習者について問題だと思っていることのみを指摘するにとどまり、学習者自身が学習者自身の問題を解決することへの助力を十分に注ぐことができずに沈黙することになるのである。

しかし、そもそも問題なのは、学習者と指導者とのあいだで問題が立ち現れてしまうことなのであり、このような問題が立ち現れる限り、学習者は指導者を度外視し、指導者は学習者自身の問題を学習者自身に丸投げするのである。

このような指導者—学習者間の問題は、解決が困難なあまりに、解決への努力を遂行することをはじめから試みることなく、互いを問題化することによって、問題の存在を抑圧することとどまるのである。しかし、あいだに問題がある限り、その問題が学習者と指導者のあいだにもはや突破し得ない隔たりとして存続することになり、そのように学習者と指導者との直接的な関わりが実現されていない限り、学習者は指導者を指導者として認めぬまま、孤独な学習者として自らを認識し、指導者は学習者自身の問題は学習者自身が解決するしかないとはじめから学習者自身の問題解決への努力を遂行することなく、指導者としての責任を果たさずに自己を正当化するのである。

こういった出来事は、学習者と指導者とのあいだに問題が立ち現れることと同時に出現する全体的状況なのであり、あいだの問題が解決されない限り、学習者の指導者を度外視すること、指導者の学習者への指導の不徹底が否応なく立ち現れてしまうのである。

そのため、あいだの問題の解決をどちらかに促すことによって問題の解決を図るのでは、その問題を解決しようと思う原初の段階で機能不全に陥ってしまうのである。なぜならあい

だの問題は、あいだの問題なのではなく、相手の問題なのであり、その問題の形成に自らは関わっていないと両者が考えるためである。

そのため学習者と指導者のあいだの問題の存在は、学習者にとっても指導者にとっても解決することのできない、絶望的なほどに解決が困難な関係性の危機を告げ知らせているのである。

このような関係性の危機を解決するためには、学習者と指導者のあいだの問題を各自にとって問題であるとお互いが気付かぬままに問題が解決されてしまうような理論が必要なのである。なぜなら、各自があいだの問題を自分の問題として主題化しようとしても、その問題の解決を図る方法が分からないために、自らの問題として捉えることができず、仮にあいだの問題の存在に気付いたとしても、それを解決する努力を遂行することの価値に気付くことができるのは、問題が解決された後のことなのであって、その問題を解決していこうと努力することがないままに、自分が自分自身の問題だと思っている問題にのみに関心を向けることになるからである。

そのため、美術制作の学習と指導においては、学習者と指導者のあいだの問題があらかじめ明示化された状態で存在し、その問題の存在を学習者と指導者が共に解決していくことを通して、お互いが本当の学習者、本当の指導者になるように差し向けられて行かねばならないのである。そして私は本稿においてそのような学習者と指導者との関係の問題を解決するための方法論を哲学として展開していくための構想を提示しようとしているのである。

#### 4. あいだの問題の内実

学習者と指導者のあいだに存在する問題というのは、学習者自身、指導者自身にとっては、感じられてはいるがなぜそれが問題として感じられているのかは分かり得ないあいだ感じられるだけの問題である。ただ感じられるだけの問題であるが故に、その問題をどのように解決して行けば良いのかが分からないのである。

そのように問題は問題として主題化されないままに、解決不可能な問題として潜在的に存続することになる。そのような潜在的な問題を顕在化させるためには、それ相応の方法が必要なのであり、その方法が哲学に求められるのである。

ところがそこで問題なのは、哲学的方法と呼ばれるあいだの問題を解決させる方法論の内実なのであり、それについてここで述べていこうと思う。

それにはまず、なぜ哲学的思惟が美術制作の学習や指導にとって有効であるのかを明らかにせねばならない。しかし、そこでさらに問題となるのが、ここで言われている哲学的思惟とはどのような思考なのかということである。

これは哲学一般に言えることであるが、哲学というのは反省の学問である。反省を通して

自らの認識や行為などを明らかにし、それによって自らの生を豊かにしていくことができる。つまり、反省という行いは本来は自分自身のためにあるものなのであり、自分自身の生を豊かにした結果として、他者に対してより良い態度で向かえるようになる。

つまり哲学をすることは、それを通して自身の他者やあるいは世界との関わりを変化させそれによって自らの生を豊かにすることのためにあるのである。そのため哲学をすることは根本的にひとりて為す作業なのであり、他者との関わりを絶つことを通して可能になる行いなのである。

ところが、多くの実践的活動は、そこで問題となることが自分自身のことである以上に自分自身の外側にあるもの、例えば、美術であれば色や形、運動であればどのように動くのかという動きそのもの、音楽であれば音や演奏方法なのであり、こういった自分自身ではないもの、自分自身によって捉えられることによって立ち現れるものは、多くの場合それ自体として実在的に存在する事柄として取り扱われ、実在的に存在していると考えられ得るがゆえに、誰にとっても同じように認識され、同じように認識されるがゆえに、同様の認識であるという信憑を基盤に同じ事柄について他者と共に問題解決に取り組もうとしてしまうのである。そのため、実践の現場ではそもそも哲学的思惟がなじみ難いのである。

そのように哲学的思惟がなじみがたい実践の場においてなお哲学を導入しようとするれば、それは一般的な哲学像としての難しいことを考えるものといったあり方での哲学であってはいけないのである。つまり、実践の現場での哲学は、当たり前のことを難しく述べているように思ってしまうような哲学ではあってはならず、実践に携わるものにとってどこまでもなじみやすい言葉と方法で為されなければならないのである。そのため、実践の現場のための哲学は実践の現場ですでに使われてしまっている言葉で、実践的活動に即した方法でもって行われなければならないのである。

そこで問題なのは、実践的活動に即した方法とは何かということである。言葉の問題は、実践の現場にすでに使われている言葉を使っている段階で、なじみがたさを乗り越えることができている。しかし、方法に関する問題は、なじみがたいか否かということではなく、そもそも、実践的活動に即した方法とはどのようなものなのかが明らかでないということである。そこで次に実践的活動に即した方法について述べていこうと思う。

## 5. 実践的活動に即した方法について

実践的活動においては、主題となる問題が自分の外側にそれ自体として存在すると思われる事柄であるため、実践的活動に携わるものにとってはもっとも問題となるのは、美術であれば、どんな色で、どんな形で、あるいはどんな素材で作るのかということであり、その他の実践についても、「どのような」、あるいは「どのように」という言葉で問われる自分の外

側にある、その実践によって形成が目指される形成物、あるいは、その実践によって獲得が目指される獲得物についての問いか、あるいは、それらをどのように形成し、どのように獲得するのかという方法への問いなのである。

そのため、哲学一般で取られるような「とは何か」というあり方で表現される意味や事柄を理解することへと向けられた問いとは異なるのである。そのため、「とは何か」という問い方をするような方法では実践的活動の中では受け入れられ難く、また、実践の場に即していないと言わざるを得ないのである。

ではどのような方法であれば実践の場で受け入れられうるのだろうか。それは端的に言えば、「どのような」、あるいは「どのように」といった言葉で表現される実践の中での問いの答えをより明確化させることを助けるような方法だと言える。それはより具体的にはどのようなものなのかというと、反省の方法の問題である。

多くの場合実践の場で取られる反省の方法というのは、完了した出来事を後から反省し、そこで捉えられた過去の出来事から次にすべきことを決定していくような反省の方法なのである。このような方法においては、反省の結果として決定される為すべきことは、為したことの反転、つまり、例えば何かができなかったとすると、そこでできなかったことを注視するようにこころがけていくように仕向けていくような反省の方法なのであり、ここで注視される内容というのは、それ以前の段階でできなかったこととして自分に意識されている出来事なのである。そのため、できなかったことをできるようにしようと思うようになるだけの、反省の仕方なのであって、そこで何らかの課題を形成し、その課題の解決に向けて前回と同じように努力するといった進展の経過を取るなのである。

ところがこのような方法は、実践的活動に向かうその向かい方に対してはまるで反省が加えられないのであって、これでは単にできなかったことが気になりつつ実践を行っているというぐらいのものでしかないのである。

しかし、実践において問題なのは「どのような」、あるいは「どのように」という言葉で表現される事物や方法への問いなのであり、この問いが明らかにされるような反省の方法でなければ、実践的活動にとって有効性を持ち得ないのである。

そこで問題になってくることは、いかにすれば上に挙げた事物や方法への問いがいかにして明らかにされていくのかということであり、このことが明らかにされることで、どのようにすれば、この事物や方法への問いをより明確化を進めていくことができるのかが明らかになるのである。そしてこのことが明らかにされることで、私たちはどのようにすれば、実践の場に有効な哲学の方法を明らかにすることができるのかが明らかになってくるのである。

## 6. 実践的問いの明確化のなされ方

実践の問いは、「とは何か」というあり方で表現される事柄とは異なる。実践の問いというのは、「どのような」、あるいは「どのように」というあり方で表現される事物や方法への問いなのであり、この二つの問いに答えることを通して、課題を明確化することで、形成物の形成や獲得物の獲得を実現するのである。そのような形成すること、あるいは獲得することが実践には重要なのであって、知識を知り、事柄を理解することは実践においては取り立てて重要な事柄ではないのである。そのため、「とは何か」という問いでもって明らかにされる事柄とは重要視されることが異なるのである。

そのように、実践的活動においては、「とは何か」で明らかにされる知識や事柄に関する理解は、それほど重視されず、仮にその理解が目指されるとすれば、何かができることに向けての思考に使用される言葉を理解するための条件を整えるためになされるのであって、そこから実践的活動ができるということに向けては、さらに別の経験の領野を拓かねばならないのである。そのような新たな経験の領野は、実践を行うものにとって予感されてはいても、明確化されていない、漠として存在しているだけの可能性なのである。このような可能性が実践的活動との関係の中で予感として立ち現れつつ、それらが明確化されたりされなかったりしながら、少しずつできるということの能力が拡張されていくのである。

そのようにして実践的活動は進展していく以上、知識や事柄を理解する「とは何か」という問いでは、実践的活動を充実したあり方で進展させていくことは不可能で、そうなると次に問題になることが、いかにして実践的活動にとって適切な問いを立てることができるのかという問題なのである。

実践的活動にとって適切な問いというのは、これまでも述べているように、「どのような」、あるいは「どのように」という言葉で表現される問いなのであり、この言葉で問いが表現されるとき、すでに各々の実践の中で新たな経験の可能性が予感されてしまっているのである。

しかし、その予感そのものを予感する自己自身が自覚することはまれであり、この予感は多くの場合、問いとして働くのではなく、自分の能力の無さとして取り扱われるのである。これはどういうことかということ、何かができないと感じるとき、そのできなさというのは、実践を行う各自の活動との関係の中で立ち現れるのであり、その立ち現れ方というのは、その活動とのあいだに、実現が困難な経験可能性としての「これができるということである」という経験のあり方との隔たりが感じられることによって、それが予感として取り扱われるのである。

つまり、実践的活動における問いというのは、その問いを持つ以前に自分とできることとのあいだに隔たりが感じられてしまって、その隔たりの表現として問いが立ち現れてくるの



である。そしてそのような隔たりをどのように埋めていくのかということが次の問題になるのだが、実践に携わる多くのものにとって、この隔たりをどのように埋めていくのかという問いは立てられずに、また、その隔たりを埋めることのために練習や訓練を行っているという自覚もなく、単に自分の外側にある何かができることに向けての練習や訓練が行われるにすぎないのである。

そのため、仮にある練習や訓練によって、隔たりが埋められて行かない場合、その隔たりを埋めようと努力が展開されるのではなく、隔たりが埋められないという事実を変えるための様々な手段を講じることとして様々な練習や訓練を試すような問題解決の方法が採用されるのである。

こういった問題解決の方法は、問題をなぜ解くことができるのか分からないままに問題を解いているようなものなのであり、実践中での問題解決は、問題を解こうと努力することによって解決されているのではなく、ある練習や訓練の結果として自分でも知らないうちに問題が解決されてしまっているというあり方で問題が解決されてしまっているのである。このように実践の問題が解決されていくとき、実践に適した問題であると思われる「どのような」、あるいは「どのように」という言葉で表現される問いというのは、見せかけの問いとして働くのであり、こういった問いというのは実は解決されるべき問いなのではなく、それらが違和感として立ち現れている経験世界に生きているということの表明でしかないのである。

つまり、「どのような」、あるいは「どのように」という問いが立てられてしまっている段階でもはや実践的活動における能力の拡張は停滞してしまっているものであり、実践に携わるものは、そのような問いが立てられないうちに自らの問題を解決して行かねばならないのである。だとすれば、実践というのは徹底して問うことから隔絶された経験の領野なのであり、問うことなしに経験が進展し能力が拡張することにおいてなされるべき事柄なのである。

## 7. 美術制作の学習と指導の関係における能力の拡張について

美術制作の実践においても、ここまで述べてきたように、「どのような」、あるいは「どのように」という問いが立てられてしまった段階でもはや能力の拡張は停滞してしまっているものであり、このような問いを持つことなしに経験が進展していくことが望ましい。しかしながら、実践における問いは持ってしまうのが通常のあり方なのであり、このように問いを持ってしまうのは、いわばできないという事実の表明でしかないのである。つまり「どのような」、あるいは、「どのように」と言語的な問いを持ってしまうことは、できないという事実の表明でしかなく、解決されるべき問題を明らかにしているわけではないのである。

このことが学習者と指導者との関係の中から立ち現れてくる問題の内実なのであり、「ど

のような」、あるいは「どのように」と問うことを通してできないという事実を表明することしかできないということそれ自体が、学習者と指導者の関係の問題の内実なのである。だとすれば、学習者のできないという問題を解決に導くためには、学習者のできないという事実がどのように立ち現れてくるのかが明らかにされなければならない。

学習者にとってできないという事実がどのように立ち現れてくるのかというと、それは端的に言えば、できるようになりたい事柄とのあいだに隔たりが感じられてしまうというあり方でできなさが立ち現れてくる。

できないということは、できるようにしたい事柄とのあいだに隔たりがあるということなのであり、次に明らかにされるべきは、この隔たりがどのように立ち現れてくるのかということである。

できるようにしたい事柄との隔たりは、その隔たりが感じられるということにおいてできるようにしたい事柄が立ち現れるというような性質を持っており、できるようにしたいということと、隔たりが感じられてしまうことは同時発生なのである。ということは、何かをできるようにしたいと思った段階で、それとの隔たりが生じてしまっているのであり、そこに隔たりがある限り、それらを獲得することは困難な試みなのである。

ということは、実践的活動における充実した能力の拡張というのは、問いが立てられないことにおいて実現されるのであり、まず能力の拡張が立ち現れ、その結果として問いとその答えが同時与えられてくるのである。これはつまり、日々様々な練習や訓練をしていることの中で、何かが形成され、何かが獲得されてしまった結果として、形成されていなかったことと形成されたこと、獲得されていなかったことと獲得されたこととの差異において、「以前はこれが分からなかったが今は分かるようになった」というあり方で問いとその答えができるようになったことの後を追うように立ち現れてくるのである。

そのため、実践を学ぶもの自身の本来の問題である何かができないことは、そもそも問いとして立てられず、立てられたとしても、それはできないということの表明でしかないのであり、できないということの表明でしかないために、いかにできないのか、どのようにすればできるようになるのかということを経験者は考えることができないのである。つまり、もっとも根本的な問題とは、できないと感じており、できるようにになりたいと思っている事柄との隔たりが感じられていることであり、これをどのように埋めていくのかということが問題なのだが、その問題は学習者にも指導者にも気付かれることのない完全に隠された問いなのであり、仮にその問いに気付いたとしても、ただ隔たりが感じられているという事実を捉えるのみで、それをどのように解決して行けば良いのかは明らかにされがたい問題なのである。

こういった解決困難な問題を明らかにするのが私の哲学研究の課題なのであり、この課題が解決されることを通して、できないという事実を適切に解釈し、自ら自分の問題を解決し

ていくことが可能になるのである。

## 8. 自らの問題を解決する方法

実践的活動における様々な問題を解決して行くに当たっては、重要なことは、問題を自分の問題とは捉えずにあいだの問題、つまり、できるようにしたい事柄とのあいだの問題と捉えることである。実はここに学習者と指導者との関係の問題が含まれてしまっているのであり、学習者と指導者との関係の問題が立ち現れてくるその立ち現れ方というのは、まず、できるようにしたい事柄との隔たりというもっとも根源的な問題が潜在し、その潜在する問題が、学習者と指導者との関係の中で顕在化されるといったあり方で立ち現れてくるものなのである。

つまり、できないという問題が問題として明示的に立ち現れてくるのは、学習者と指導者の関係においてなのであり、その関係さえ無ければ、問題は明示的に立ち現れることはないのである。ところが私たちは、日常の生活の中で指導者であったり学習者であったりしながら生活せざるを得ない場合が多く、どちらかの立場に立ってしまうということの中では、すでにできないもの、できるようにになりたいものとの隔たりを感じることは避けられないのである。

そしてこの顕在化された隔たりは、できないもの、できるようにしたいものとのあいだの問題としては捉えられず、学習者にとっては指導者との関係の問題として、指導者にとっては学習者との関係の問題として、問題の解釈がすり替えられてしまうのである。

それによって、問題の発生をできないものとの隔たりが立ち現れてしまうことに求められるのではなく、お互いにとっての相手の能力不足として捉えられてしまうのである。そのため問題の解決は相手の能力の向上を要求するというあり方で、しかもそれがお互いにとって無自覚的に立ち現れてしまうのであり、できない何かができないものほどできるようになることを要求されるという状況が立ち現れてくるのである。しかし、学習者にしても指導者にしても、できないということの問題をどのように解決していけば良いのかがそもそも明らかになっていないがために、できないことが問題になっているのであり、できないということが問題になった段階で、もはや問題解決への努力はお互いがお互いに要求しあう状況が立ち現れてしまうのである。

このような問題の解決をお互いがお互いに要求し合うような状況こそがまさに、学習者と指導者とのあいだの問題そのものなのであり、このようなできるようになることを要求し合ってしまうという出来事が立ち現れてしまうことにおいて、すでに学習者—指導者関係は崩壊しているのである。

このような学習者—指導者関係が崩壊していることの直中では、学習者は自らの問題をど

のように解決して行けば良いのか分からない、悩みの中にいる学習者となり、そのとき指導者は面倒な学習者を持ってしまったと、こちらも悩まざるを得ない状況に立たされるのである。

こういった状況を打破するためには、まずはお互いが自分の能力不足を自認した上で、この能力不足をどのように解決して行くべきかをお互いがひとりで考えていく必要があるのである。しかし、ひとりで考えるといっても、それは悩みの中に生きることとは違って、一つ一つ課題をこなしていくように問題が解決されなければならない、そうすることにおいてのみ、私たちは、真の学習者、あるいは、真の指導者たり得るのである。

## 9. 課題解決の方法

学習者と指導者のあいだの問題は、各自が自己の責任において、一つ一つ課題を解決していくように少しずつ解決して行くべきものである。そこで問題になることは、この問題の解決の仕方である。この解決の仕方が一つ一つと言われるのは、問題が一見して一つの大きな問題であるように思われるからである。しかし、そのように大きな問題に見えるのは、あいだの問題を自己の責任において解決していこうとしていないためであって、自己の責任において解決していこうと思うとき、あいだの問題は、お互いが一つ一つ解決して行くべき課題になるのである。

そこでの課題解決の方法というのは、あいだの問題が立ち現れる場をもう一度生きなおすというものである。生きなおすというのは、一つの反省の方法なのではあるが、この反省の直中では、過去に体験された状況全体をもう一度体験し直し、それを通して、自らの事柄への関わり方を明らかにしていくのである。その事柄への関わり方を明らかにすることにおいては、状況を生きる自己に関する内容、例えば運動であれば、からだの向きや動かし方などとその自己にとっての外的な状況、例えば、自分はどのような場所において、周りにはどのような人がいて、その人はどのような動き方をしているのかといったことを明らかにすることができるのである。そのようにして明らかにされた事柄というのは、それ自体一つの気づきなのであり、このような気づきを重ねることを通してできていなかったものとの隔たりが解消され、できるという状態を獲得することができるようになるのである。そのようにしてできるという状態が獲得されると、学習者と指導者のあいだの問題は、学習者自身の問題が無くなってしまうのであるから、もはや問題ではないのであり、問題ではなくなってしまうというあり方で解決されてしまうのである。

つまり、学習者と指導者との関係の問題は、その問題を解決しようとすることによって解決されるのではなく、自らの問題をお互いが解決していこうと努力することにおいて結果として解決されてくるものなのである。

## 10. 哲学的思惟を実践的活動に運用すること

哲学というのは一見すると言語によって行われるもので、言語的思考が運用されることが少ない実践的な活動にはなじまないもののように思われる。なぜそのようになってしまうのかというと、それは、哲学の言葉が日常語や実践的活動の中で使用される言葉とは異なるからである。つまり、実践の現場に哲学を持ち込もうとしても、もはや言葉の段階で受け付けがたいものとなっているのであり、哲学を実践の中にかに浸透させようにも無理があるのである。

とは言え、哲学を学ぶことが実践を行うものにとって本当に有効であるのなら、浸透させていくことも可能である。そしてそこで使われるべき方法も、状況を生きなおすという方法なのであり、自分が哲学的思考を運用する場面を繰り返し生きなおすことを通して、その場面でどのように哲学的思考が運用されているのかを運用する自己自身が自覚することができるのである。

つまり、哲学を実践に運用するというのは、それ自体が哲学作ることなのであり、そのようにして哲学を作ることを通して、私たちは自己の経験や能力を拡張していくことができるのである。そのような哲学を学ぶという行為そのものの能力の拡張について語るのであれば、例えば自らが本を読むという経験のなかで生きられる状況を生きなおし、自らがどのようにして本を読んでいるのかを明らかにする必要があるし、あるいは、実践的活動の中で哲学的思惟が立ち現れる瞬間を何度も生きなおすことの中で、自分がどのように哲学的思惟を運用しているのかを明らかにしていかなければならないのである。

そのようにして自らの哲学的実践の立ち現れ方それ自体が自分にとって明らかにされたとき、そのような実践は他者に伝えうる実践的活動の中で獲得された哲学知になるのであり、そのようにしてのみ私たちは、哲学を実践に運用することができるようになるのである。

## 11. 哲学を学ぶことと実践を学ぶこと

哲学を学ぶことと実践を学ぶことのあいだには、奇妙な親近性がある。それはどのようなものかということ、どちらも語りがたいものが問題になるということである。しかし、哲学における語りがたいものは、哲学を学ぶものにとって語りうるもの、語る可能性があると感じられるものであるのに対し、実践を学ぶものにとっての語りがたいものは、語る必要の無いもの、あるいは、語ってはいけないものとして存在しているのである。そのため両者には親近性があるものの、混じり合いがたい水と油のような関係にあるのである。

しかし、哲学を学ぶこと、あるいは実践を学ぶことという両者の学ぶという行為について考えるとき、両者の分断は乗り越えられ、一つの実践知、あるいは行為知として立ち現れて

くるのである。このようなもっとも根本的な行為知の探求を通して、理論と実践は知を獲得するという知への活動として一つに統合されるのである。

## 12. 知を獲得することとしての哲学

知を獲得することは、言うまでも無いことだが、哲学の現場だけでなく、日常生活のあらゆる場において可能なことである。そのため、日常生活のあらゆる行為が知を獲得する行為になるのである。そのため知を獲得するためには必ずしも本を読んだり、あるいは、特別な練習や訓練をする必要はなく、自らが生活することの中で様々な知を獲得してしまっていることに気付ければ良いのである。そしてそのための方法と言うが、状況を生きなおすということなのであり、これを通して私たちは不断に知を獲得するという行為を行ってしまっていることを自覚することができるのである。

そのような状況を生きなおすことを通して、あらゆる実践は、それ自体理論形成の場になるのであり、哲学書を読まずして哲学を学ぶことが可能になるのである。

このような実践を介した哲学研究を行うことを通して、私たちはその実践に特化した哲学研究を行うことができるのであり、同時に、実践に関わる全ての人が、各自の哲学を形成する可能性に出会うことができるようになるのである。

そのようにして各自が自分の知を自分の実践の中で高めて行くことを目指すとき、誰もが哲学研究者になるのであり、同時に誰もが哲学の共同研究者になり得るのである。

# **The Conception of Philosophical Theory to Connect the Learning and Teaching of Art Production**

AKAMA, Yuta

The problem of the learning and teaching of art production is the problem that is difficult for learners is also difficult for teachers to teach. That is to say, the problem that learners cannot solve is coming up by not only the lack of capability of learners, but also the lack of capability of instruction of teachers.

This problem truly occurs between learners and teachers, however it is seldom treated as the problem between learners and teachers and is treated for learners as the lack of ability of themselves and for teachers as the lack of ability of learners. But the problem in art production and its education is not always comes up by the ability of learners.

That is way, what I try to present in this paper is to treat this 'between' problem as between problem as it is and to present the conception of philosophical theory to change this circumstance that learners fall in a misbelief that they are lack of ability and solve the problem by the hand of learners and teachers with each other.

The time of the realization of this philosophical theory would be the time of disappearance of talent of art production or then everyone concern the word 'talent' as the eagerness about art production.